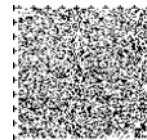


社会福祉法人 創文会
相談支援事業所 ハートピア出雲 情報誌「トピア」



第59号



〒 693-0014
出雲市武志町 693-6
Tel : 0853-2 3-2 7 2 0
Fax : 0853-2 3-2 7 2 1
E-mail shien@heartpia.or.jp
ホームページ
http://www.heartpia.or.jp

<発行所>
相談支援事業所
ハートピア出雲

【相談支援従事者養成研修の新カリキュラムへの移行について】

相談支援従事者養成研修には相談支援専門員として相談支援に従事するための入口となる「初任者研修」、所定の期間内（5年）での更新研修「現任研修」に加えて、平成30年度より指導的役割を担う主任相談支援専門員が位置づけられ、「主任相談支援専門員研修」が創設されています。

全国的には令和2年度から新カリキュラムによる「初任者研修」「現任研修」を実施、準備の整った都道府県から「主任相談支援専門員研修」を実施しています。島根県では先駆けて令和元年度から「初任者研修」「現任研修」を新カリキュラムで実施、令和2年度から「主任相談支援専門員研修」を実施しています。

新カリキュラムへの移行に伴い、意思決定支援への配慮、高齢障害者への対応やサービス等利用計画の質の向上、障害福祉サービス支給決定の適正化等を図り、質の高いケアマネジメントを含む地域を基盤としたソーシャルワークを実践できる相談支援専門員を養成するため、カリキュラムの内容を現行より充実させる改定が行われています。

カリキュラム見直しのポイントとして、主体的かつ参加型の学習方法への転換（学習観の転換）が図られ、演習や実習のさらなる重視、オープンエンドアプローチの視点の導入がされています。また、研修全体の連動性も重視されています。

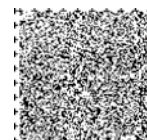
個別支援から地域支援へ、地域を基盤としたソーシャルワークを実践できる相談支援専門員になれるように、日々の相談支援業務を通して、自分自身もスキルアップに努めていきたいと思えます。

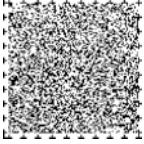
（文：相談支援事業所ハートピア出雲 相談支援専門員 布野 寛明）



もくじ

- 相談員養成研修の新カリキュラム・・・・・・・・・・・・・・ 1 p
- 電話リレーサービスについて・・・・・・・・・・・・・・ 2 p～3 p
- 言語聴覚士からのミニクイズ・・・・・・・・・・・・・・ 3 p
- ミニクイズの答え&新人紹介・・・・・・・・・・・・・・ 4 p





24時間365日

聞こえない人と聞こえる人を電話でつなく「電話リレーサービス」

電話リレーサービスが始まったきっかけは、2011年3月11日東日本大震災発生時に遡ります。東北地方に住んでいる聞こえない人、聞こえにくい人に加え、手話通訳者や要約筆記者も被災して情報保障ができませんでした。そこで、岩手、宮城、福島県の3県に住んでいる聞こえない人のため、(公財)日本財団が2011年9月11日に東京で「遠隔情報・コミュニケーション支援事業」を開設し、遠隔通訳支援、代理電話支援を行ったのです。

私が若い時、親類の家に車で行こうとした時の話です。行く途中で、エンジンが止まってしまいました。車が停止して、JAFに連絡する方法がありません。そこで、ガソリンスタンドを探しに行き、やっとの

ことで見つかりました。スタッフに筆談をして、助けてもらいました。時間は1時間半位かかりましたが、車の故障のため、結局親類の家へ行けませんでした。

またある日、会社から帰ると、アパートの郵便受に不在連絡票が届いていました。時間が遅いと、間に合いません。次の日の朝、郵便局へ不在連絡票と印鑑と免許証を持参して郵便物を受け取りました。しかし、クロネコヤマトや佐川急便は不在連絡票に記載のドライバー直通電話をしたいのですが、聞こえないため連絡出来ません。代わりに市役所で設置手話通訳者に電話してもらいました。自分で電話をしたいのにできず、代わりに聞こえる人に頼むしかなく、大変迷惑をかけることもありました。

実際に、山や海で聞こえない人が遭難したり、夜遅くに車が故障したり、家族が急病になった時、119番通報が出来ないなど、本当に困ったことがたくさんありました。

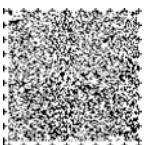
そこで、(一財)全日本ろうあ連盟は2013年9月、日本財団電話リレーサービスを



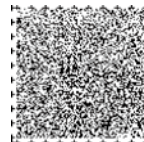
●総務省発行のリーフレット

を試験的に実施し、3県の聞こえない人だけではなく、全国に向けて1,000人募集することからスタートしました。

そして1年ごとに、利用登録人数が増えていきました。2018年6月約7,500人、



2019年4月 約 8,900人、2020年9月 約12,200人、2021年4月 約13,000人と。つまり、きこえない人ときこえにくい人と発話困難な人は、聞こえる人と同じく、電話も生活の一部として必要だということがわかりました。



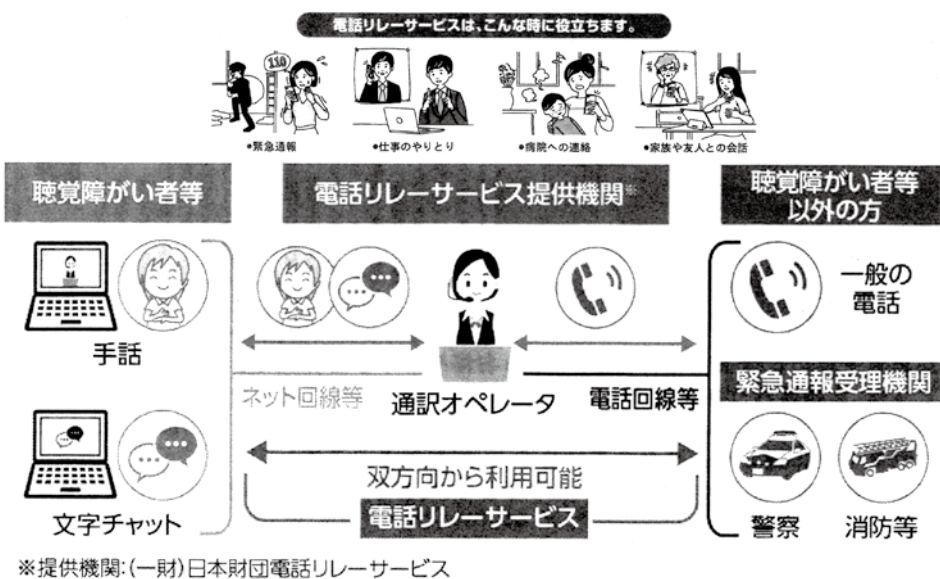
このサービスは、今いる場所から自分ですぐに電話をかけられるのでとても便利な反面、きこえる人から電話をかけてもらう仕組みがなかったり、利用時間は午前8時～午後9時まで、緊急通報はできないなど、制約の多いものでした。

そのため、(一財)全日本ろうあ連盟の運動の結果、電話リレーサービスが総務省・厚生労働省及び全国の聴覚障害者情報提供施設等の関係者、とりわけ(公財)日本財団と(一財)日本財団電話リレーサービスの尽力により、2021年7月より公共インフラとしてスタートすることになりました。

この電話リレーサービスにより、きこえない私たちの日常に「電話をする・電話を受ける」ことが加わります。きこえる人々にとっては当たり前のことです。

公共インフラになったおかげで変わったことは、大きく三つあります。一つ目は「24時間365日いつでも使えるようになったこと」、二つ目は、「緊急通報がかけられるようになったこと」、三つ目はきこえない人からきこえる人への一方通行ではなく「双方向の電話サービスになったこと」です。きこえない人がいつでも電話ができるようになって本当に良かったと思います。

(文：ワークセンターフロンティア利用者 島根県ろうあ連盟事務局長 大瀧 浩司)



「日本財団電話リレーサービス」のサイトに詳しく載っていますのでアクセスしてみてください。

<https://nftrs.or.jp/>

言語聴覚士からの「フムフム、なるほど!」～第1回～



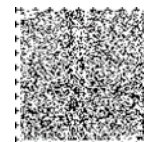
皆さん、初めまして言語聴覚士の安立多恵子と申します。

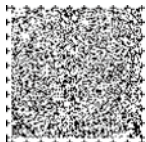
今回から、ことば・コミュニケーションについての疑問をわかりやすく解説するコーナーを担当いたします。では、さっそく今回のクエスチョンを二つ。

question 1 : 「ワンワン」「ブブブ」 という言い方は正しい日本語である

question 2 : 3歳で「チェンチェー」(先生)と発音していたら、すぐ訓練をしたほうがよい

皆さん、question 1と2は正解でしょうか、それとも間違いでしょうか?
答えは4ページに掲載しています。



**question 1 の答えは ○**

ワンワンやブブーは幼児用の正しいことばで、幼児語といえます。成人語とはイヌ、くるまやじどうしゃという通常の言い方です。

例えば「ぬい」や「マルク」でもよかったわけです。物や状況とは無関係に約束事として作り出されたもので、恣意的記号といわれています。

それに対して、幼児語はワンワンという鳴き声やブブーというクラクションの音を表しています。同じ音の繰り返しで言いやすく、イメージしやすくわかりやすいです。このような擬声語擬態語などは、物・状況との結びつきが強く、有縁的記号といわれています。

言いやすくわかりやすいことばですので、一時期は幼児語を使ってことばの理解を促します。幼児語を使用している頃は、身の回りの具体物を実際に見て、触って扱いながらことばかけしてあげましょう。

question 2 の答えは ✕

「チェンチェー」は赤ちゃんことばといわれる幼児音です。幼児音は発音が未熟で、正しくない言い方です。

発音はすぐに上手にはなりません。母音は3歳頃に上手に発音できるようになりますが、子音は6・7歳頃にやっと上手に発音できるようになります。

また早く発音できるようになる子音とそうでない子音があります。「セ」という音は、舌先を上の前歯の後ろ辺りに触れないように近づけて、その隙間からスーという擦れるような息をだすことで発音しています。ラ行と同じように、とても難しい音です。3歳では、まだ上手に発音できませんので、経過を見守ってあげる段階です。小さいお子さんたちは、発音の仕方を徐々に身につけていきます。日々、耳で聞いて、同じ音になるように舌を動かして練習しています。

上手に発音できるようになるには、個人差がとても大きいです。早くできるお子さんも、なかなかうまく言えないお子さんもいらっしゃいます。

きちんと発音しようと思っても、口唇や舌の円滑な動きができなくてまだ上手に言えないのです。そのときに、周りまで一緒に「チェンチェー」とまねをすると、誤った言い方を強化してしまいます。おうちでは無理強いせずに、正しい音を聞かせてあげましょう。

(文：ハートピア出雲ステップ 児童指導員 安立 多恵子)

よろしくお願ひします！ ～新人職員の紹介～

11月よりワークセンターフロンティアの職業指導員として入職しました宮本明実と申します。

福祉のお仕事は初めてですが、創文会が掲げる「それぞれの可能性、それぞれの能力を活かしながら」の言葉を胸に、一人ひとりの利用者さまに寄り添った訓練サポートを行っていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



宮本 明実

**編集
後記**

◆脳性まひのため手足が不自由な障害のある友人（と云っても大先輩）がずいぶん前に私に「あんたたちは学校に行けて羨ましいわ」とおっしゃっていました。若造だった当時の私は、はじめ意味が分かりませんでした。あとで知ったのですが、その友人の若い頃（昭和20年半ば頃）は障がい者は就学が免除されていた時代だったのです。つまり等しく教育を受ける機会を奪われていました。戦後間もない厳しい環境下で障がい者教育まで手が回らなかったことと思いますが、今のギャップに複雑な気持ちです。【編集長 米山】

